
十六夜植物園 (いざよいしょくぶつえん)

董香舎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いざよいしょくがつえん
十六夜植物園

【Nコード】

N3077L

【作者名】

董香舎

【あらすじ】

伯母の家で暮らしながら大学へ通うマナは、入学早々不思議な少年マサキと知り合いになる。月の美しい十六夜、鉢植えの植物に月光浴をさせるのが彼の習慣だった。やがて、マナは、美しいだけに見える十六夜月の持つ恐ろしい力と、マサキの悲しい秘密を知ることになる。そして……。

月光少年（前書き）

4回完結予定の初回です。

月光少年

「お世話をかけて悪いわね、マナちゃん。」

「いいえ、こちらこそ。わたしも母も助かってますもの。」

マイカの煌くベージュ色のセダンの中から、須美子伯母さんがわたしにほほ笑みかけました。この家の持ち主である伯母は、また、少し離れた町にある「こすもす」という小さな宝石店のオーナーでもあります。未婚の彼女はこの家に一人で住み、車で店に通っていたのですが、運転が億劫だと数年前に店の近くのマンションへ転居したのでした。

「女の子のほうがちんとしているのかしら？マサタカ君に貸してるときは、凄い有様だったのよ。ごみだらけでね。一度、隆志を連れてきたのだけど、リビングに入るなり絶句していたわ。それから、マサタカ君も、目に見える所だけは片付けるようになったの。」

わたしたちは笑い合いました。正敬君は、現在栃木に住んでいる隆志叔父さんの長男で、いかにもひ弱な現代っ子という印象を与える長身瘦躯の青年です。暢気でマイペースな性格で、常に親戚一同に話題を振り撒いています。一年前に大学を卒業し、社会人になりましたが、就職先でも何かと注目を集めているようです。

「じゃ、またね。お母さんによろしく。」

「さよなら、伯母様。お菓子ありがとうございました。」

伯母は軽く手を振り、車のキーを回しました。セダンは微かなエンジン音をたてながら、坂道を優雅に下っていきました。

正敬君と入れ替わりでここへやって来たのが、わたしこと真奈です。〇〇大学に入るのだったら、わたしの家に住んでもらえるとありがたいのだけど、勿論家賃はいらわないわ、と父の姉である須美子伯母さんが電話をかけてきたのは、合格発表の翌々日のことでした。きつと、早くに父が亡くなったため、決して多くはない母の収入で慎ましく暮らしているわたしたちを気遣ったことだったのでしょ

う。けれども、伯母の物言いはいつものとおりさっぱりしていて、そうした気持を全く気取らせませんでした。彼女は、人に気を使わずにさりげなく思いやりを示すことのできる、稀有な女性なのです。わたしと母はその申し出に飛びつきました。奨学金で大学に通う予定だったわたしにとって、出費を抑えられるのは本当に有難いことでしたから、感謝しなくちゃね、と母と話したものでした。

伯母の家は大学にほど近い丘の中腹にあり、独り者の女性の家らしく、こじんまりとした造りでした。その外観に似つかわしく、家の中には必要最小限の調度と僅かな数の装飾品しか置かれていませんでしたが、いずれもこの家の主である伯母の趣味のよさを感じさせる上等の品ばかりでした。わたしは、一年半余り、快適な生活を送りました。

いえ、今でも、ここでの生活はとても快適です。うるさい大人のいない小さな美しい家は、勉強には勿論のこと、友人たちと缶入りのカクテルを飲みながら月を眺めたり、持ち寄りで鍋パーティーを開いたりするにも格好の場所でした。伯母は時折様子を見に来てくれますが、必要以上にわたしの生活には立ち入らず、話をしながらゆったりとお茶を飲んだ後、珍しい、おいしい食べ物や、玄関の花瓶によく合う紫色の薔薇の花をそつと置いて帰るのが常でした。今日持ってきてくれたのは、「こすもす」の近くにある洋菓子店のマカロンです。そのマカロンはおいしいうえに色合いが美しいので、伯母はとても気に入っているのです。

わたしを煩わすものは何もありません。本当に何も。だのに、いえ、だからこそ、わたしはこの三ヶ月というもの、あの家のこと、あの家で起こったことを考え続けているのです。あの夜、わたしが事の顛末を見届けないまま逃げてしまったのは、ただ、ただ怖かったからです。その恐怖を乗り越えることができなかったために、わたしは、一人の人間を見殺しにしてしまった（かもしれない）のでした。あの家から走り出た瞬間、わたしは真つ二つに引き裂かれました。見届けなければ、という思いと、見たくない、という恐怖に。そし

て、今でも引き裂かれたままなのです。

久しぶりに会った伯母の姿は、なぜかあの家のことを強くわたしに思い起こさせました。いつもそうです。伯母は会うたびに静かな勇気をわたしに与えてくれます。それは伯母の天稟というべきでしょう。あの家へ行かなければいけないわ、とわたしは思いました。そう、罪悪感と怯懦に引き裂かれてしまった自分を立て直すためには、あの家へ行き、あの夜起こったことを確かめるしかありません。今日は近くの喫茶店で軽い昼食をとり、図書館へ行くつもりでした。その前に、あの家へ行ってみよう。わたしはゆっくり二階へ上がり、身なりを整えました。薄紫の地に五弁の白い花を詰めたスカート、ごくあつさりしたデザインの白のセーターとカーディガンのセットアップ、そして入学祝いに伯母から贈られた小粒の紫翡翠のネックレス。ハンカチーフと財布は、繻子の中袋のついた白いレース編みの巾着に入れて手に持ちました。薔薇色の口紅を薄くさし、白い靴を履けば、完璧な春の装いです。

扉に鍵をかけ、鍵をそつと巾着に滑り込ませると、わたしは丘の頂をめざして歩き始めました。何回となく辿った道です。道の脇にある植え込みの向こうに、あの家の屋根がちらりと見えます。静かです。ほんの三ヶ月前まで人がいたというのに、そして今でも人がある（かもしれない）というのに、生き物の気配を微塵も感じさせない静寂がその屋根から拡散していました。

初めてその家の前を通ったのは、確か、大学に入ったばかりの頃でした。クラスの飲み会に出席したわたしは、慣れない宴席の雰囲気疲れなのか、帰りのバスの中で正体もなく眠ってしまったのです。発着場で運転手さんに起こされたときは、いったい何が起こって、自分がどこにいるのか、まるでわかりませんでした。

「大丈夫ですか？一人で帰れますかね、これが最後のバスなんだけど？」

そう訊かれて、わたしはようやく自分が伯母の家に止宿中であることを思い出しました。幸い、伯母の家は発着場からそう遠くはありません。歩いても二十分足らずで帰りつくでしょう。人のよさそうな運転手さんにそう答えてお礼を言い、わたしは家へ向かって歩き出しました。いえ、歩き出したつもりで、わたしは丘の頂へ続く道に足を踏み入れてしまったのでした。発着場からは、丘の頂へ続く道と、丘の麓を通る道、そして大通りへ出る道と三本の道が出ています。まだ少しぼうつとしていたのか、わたしは、歩き慣れた丘の麓を通る道に出たつもりで、丘の頂へ続く道に入ってしまったらしいのです。どちらか両脇にブロック塀が続き、ほぼ同じ幅で街灯も少ないので、何かおかしいな、と思ったときには、もう丘をかなり上っていました。

この道は、麓を通る道と違って途中に自販機も居酒屋もないために少し暗いのですが、伯母の家の裏手に続いていますから、このまま歩いていつても戻る事ができます。まあいいわ、とわたしは思いました。月が殊の外美しい夜で、アスファルトで叩いた道が白く光ってみえます。わたしのほかに通行人は見当たりません。危ないこともなさそうだし、このままこの道を通って帰ろう。決めた。そういうえば、飲み会で、昨日は十五夜だったって誰かが言っていた。あれは誰だったかしら？つまり今日の月は十六夜月ってわけね。とりとめもないことを考えながら道を上っていくうちに、わたしはあの家の門の前に差しかりました。この道を通るのは初めてですから、この門を見るのも初めてだったわけです。白く塗られた大きな鉄の門扉には凝った透かしが施されていて、その隙間から白壁の洋館が見えました。家の前にはこれもまた白のガーデンセットが置かれ、そのテーブルには鉢植えの蘭が載せてありました。そして、ジーンズをはいた少年が、更に一個、植木鉢をテーブルに載せようとしていました。深い緑の鉢からは、半月刀のような形をした斑入りの葉と、ジャスミンのような白い花をびっしりと咲かせた花房が三つ、重たげに垂れ下がっていました。今まで目にしたことのない植

物です。植木鉢と、少年と。月の光と若葉の艶かしい香りの中、彼の姿は不思議な光彩を帯びて見え、思わず目を奪われました。

その鉢が胡蝶蘭の鉢の横に並ぶと、彼は右に左に鉢を回しました。何をしているのかしら？どうも、彼は三つの花房に月の光があたるように鉢の向きを調整しているようです。ようやく鉢の向きを決めると、彼は満足気に頷き、月を見上げました。そして、彼が踵を返そうとしたときに、わたしたちの目は合ったのです。少年は軽く会釈しました。それは、木の枝がそよ風に揺れるときのような、ごく自然な動作でした。わたしも反射的に会釈を返し、門の前を離れて、十分の後には伯母の家の居間で紅茶を飲んでいました。月と、植物と、少年。考えてみれば妙な取り合わせです。植物に月の光をあてるなんて、少し気違いじみてやしないかしら？だって、月が植物にいいなんて、一度も聞いたことないわ。けれども、少年の姿を思い出すと、あれはきつと真つ当な理由のあることに違いないとも思えてくるのでした。少年の態度にはどこかとても真摯なところがあり、いいかげんな思いつきや妄想的な信念に因って行動しているようには見えなかったのです。

翌日は日曜日でした。思いがけず早く目を覚ましたわたしは、好奇心に駆られて家の裏手の道を上がってみました。丘の上の家はひとつそりと静まり返っていました。門扉の隙間から見える家と庭の様子は、昨晚と殆ど変わっていません。ただ、植木鉢は、白いテーブルの上からきれいさっぱり片付けられていました。ああ、やっぱり、鉢に植えた草に月光浴をさせていたんだわ、とわたしは思いました。「おはようございます。」

ひよっと昨晚の少年が目の前に現れました。昨日ははっきり年齢が判りませんが、見たところ中学生ぐらいでしょうか。わたしは吃驚して、反射的に頭を下げました。

「おはよう………ございます。」

「また会いましたね。木が好きなんですか？」

わたしは、大きく息を吸って態勢を整えました。不意を突かれて

遅れをとったので、せめて彼を感心させるような返事をしなければ
と思ったのです。しかし、口をついて出たのは、

「そうではないの。そうではないけど……あなたが植木鉢に月光
浴をさせているのを見て、なんだか気になったのよ。普通はあまり
やらないことだから。」

という答えでした。しまらないなあ、とわたしは思いました。正直
に思ったことを言うてるだけなんだもの。もっと気の利いたことが
言えそうなものなのに。

「あの鉢はちよつと理由ありで、月の光に当てると元気になるん
ですよ。それも、十六夜月でないと駄目なんです。」

「神秘的ね。まるで魔法みたいなお話。」

そうわたしが言うと、心なしか彼の表情が曇ったような気がしま
した。話題を変えたほうがいいかしら？わたしは慌てて当り障りの
なさそうな話題を探しました。しかし、彼のほうがわたしに問いか
けました。

「学生さんですか？」

「ええ、そうなの。大学に入ったばかりで専攻は哲学、になる
予定。」

「才媛なんだ。」

「そんな格好いいものじゃないわ。だって、わたしって、なんだか
アンバランスなんだもの。いつも、どこにいても、おさまりが悪く
感じるの。」

彼はわたしの顔を見つめました。とても真面目な顔をしています。
昨夜、植木鉢の向きを変えていたときと同じ表情でした。少したっ
て、彼はふうつと大きな息を吐きました。真剣そのものだった表情
が僅かに緩んで、絞り出すような声が彼の唇から漏れました。

「アンバランスだとは思いませんよ。貴女はとても落ち着いている
し、自分のこともよく解っていると思います。強いておさまりが悪
いところを挙げるとするなら、髪型かな。その髪型は似合いません
よ。」

「え？」

髪型って言われたような気がするけど、本当に言われたのかしら？彼は中学生くらいに見えます。こんな年下の男の子が、まだ子供の殻を半身に纏っているような男の子が、髪型、ですって？しかも似合っていない、ですって？

「もつとふんわりさせたほうが似合いますよ、きつと。」

「そうは思わないわ。私の髪は真直ぐだから、切り揃えるところなの。そして、わたし、この髪型が嫌いじゃないのよ。人はあるがママが一番美しいと思うわ。」

そう言った瞬間、彼の目に可笑しそうな表情が浮かんだのを、わたしは見逃しませんでした。年上の女に髪型わたしの髪型のことだけちをつけるなんて。おまけに、わたしが気を悪くしたのを見てとって、面白がつてるわ！

彼が植木鉢に月光浴をさせていた理由は判りましたし、無礼千萬元子だとも思いましたから、もう彼には取り合わないことにしました。わたしは、素っ気なくさよなら、と言うと、さっさと坂道を下って伯母の家に戻り、猛烈な勢いで掃除を始めました。むしゃくしやするときには徹底的に掃除をするに限りです。日曜日で時間はたっぷりありましたから、家中が綺麗になる頃には、気分もすっきりしました。

それきり、いつとはなしに忘れてしまった少年のことを思い出したのは、彼と言葉を交わしてから一ヶ月が過ぎようとしていた頃、ある必修学課で学習発表の班分けが発表されたときでした。この学課では、三人が一班となつて、自分たちで選択したテーマに基づいて調査、研究、発表を行わなくてはなりません。わたしと同じ班になったのは、一年浪人して入学してきたナミコさんと、すごいバイオリニストの伯母さんがいるというダイジロウ君でした。とは言っても、本人はごく普通ののんびりした青年です。

「ああ、眠う。」

ダイジロウ君は、机に足を載せて大きな欠伸をしました。テニス

の同好会に所属している彼は、昨日、試合後の打ち上げに参加し、深夜まで、というか今朝まで無茶飲みしたのだそうです。それにしてもみっともないこと。自分が美しくもなければ蟲惑的でもなく、行儀が悪ければ醜く見えるだけだということが解っていないのかしら？

「まあまったく、男ってどうしてこうなのかしらねえ？うちの父も、兄も、いつつもそう。そんな飲み方して、楽しい？」

ナミコさんは少し眉を顰めました。

「付き合いもあるし、仕方ないです。そんなこといちいち咎め立てすんの、止めた方がいいですよ。うざくて男にもてなくなりますからね。」

ミナコさんは、中学生の頃から付き合い合っていた恋人に振られたために、彼の通っている首都圏の私学への入学を止めたという噂でした。それを知ってか知らずか、ダイジロウ君の答えには棘がありました。ミナコさんは、一瞬、般若のような恐ろしい形相になりましたが、わたしの困惑しきった表情を見て、

「わたしだってお酒は好きよ。だから、無茶な飲み方はしないほうがいいって言うてるだけ。」

と言い残し、荷物をまとめて講義室を出て行ってしまいました。わたしは慌ててダイジロウ君に向き直りました。

「どうするの？わたしたち、これから共同課題をこなさなきゃならないのよ。早く行って、ナミコさんに謝って。じゃなきゃ、三人とも単位を落としちゃうわ。」

「やだね。」

ダイジロウ君は素っ気なくわたしの頼みを拒絶しました。

「小太り、メガネ、おまけにタイトスカートにソックス、サイテーだぜ。あんなもさい女といっしょの班なんて、やる気出ねえよ。」

一気に言つと、彼はわたしのほうに向き直り、意地の悪い目つきでわたしの全身を素早く眺めわたしました。

「こっちはこっちで色気ゼロのトウモロコシ頭。その髪型何とかし

てくれよ。目障りなんだよ。男としてモチベーションが下がるだろ。単位は来年に持ち越した。」

サイテーなのはあんたよ、と言いつ返す間もなく、彼も出て行ってしまいました。講義の終了時間までにはあと二十分もあります。他の班は打ち合わせに入りました。どうしよう？わたし一人では何もできませんが、今更別の班に入れてもらうわけにはいかないでしょう。何もかも根性曲がりのダイジロウめのせいです。とりあえず、ダイジロウの野郎はこれから徹底的に無視することにして、この学課の単位をどうやって取得するか、わたしは考え始めました。あんなくだらない男の我儘に振り回されて、必修科目の単位を取り損ねるわけにはいきません。何といつても、わたしは、世界的に有名なバイオリニストを輩出するような名家の令嬢ではなく、卒業後は手堅い仕事に就くことを目論む貧乏学生なのです。

「ごめんなさいね、さつきは。」

その声をかけられて振り向くと、ミナコさんが立っていました。困ったような顔をしています。

「わたしの父は、少し酒乱の気味があるのよ。兄もそうだから、つい、余計なことを言ってしまう。悪かったわ。反省して戻ってきたの。別にダイジロウ君が何かしたってわけではないんだものね……で、そのダイジロウ君は何処に行ったの？」

「もういいです、あんな奴。」

新たな怒りがこみ上げてきました。

「ミナコさんが出て行ったすぐ後に、捨て科白を吐いて出て行っちゃったんです。わたし、トウモロコシ頭なんて言われたんですよ。本当に最低の男！あんなの放つといて、二人で頑張りましょう。頑張って特Aを取って、ダイジロウなんか見返してやりましょうよ。」

学課の成績は、よいほうから順にA・B・C・Dの四段階に分けて評価されます。そして、もっともよい成績であるA評価を得た者の中でも特に優秀な成績を修めた者には、「特A」の評価が与えられるのです。

「無視するわけにはいかないわよ。わたしたちの単位はともかく、彼の分はどうするの？」

「来年の前学期で取って言うてました。自分で受講を止めたんだもの、単位は自分で何とかしてもらわなきゃ。」

「だって、このコマの単位を取っておかなきゃ、来年の前期での二単位目は受講できないのよ。必須科目なのに、このままじゃ、彼、留年が確定しちゃうわ。」

「え、そうだったんですか？」

「入学式の後で説明があつたじゃない。聞いてなかったの、あなた？そういう科目が、確か全部で三つあつた筈よ。」

わたしたちは黙りこみました。そして、一瞬の後、弾けるように笑いだしました。お腹が痛くなるほど笑った後で、他の受講生たちが非難の眼差を投げかけているのに気づき、わたしたちは慌てて笑いを飲みこみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3077/>

十六夜植物園（いざよいしょくぶつえん）

2010年10月9日23時01分発行